

受付番号	09-003
------	--------

## 留学・研究計画書

氏名 鈴木 多聞	留学機関名 中央研究院近代史研究所
留学先国名 台湾	留学期間 西暦 2010年4月～2012年3月
研究テーマ 第二次世界大戦と東アジアの戦後体制の形成	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本研究の目的は、戦争と平和の問題について考えることである。戦争を終わらせ平和を実現することは、現代に通じる課題であろう。また、戦争の終わり方は戦後世界のあり方を規定する。近年、国際政治学の分野では、戦争終結に関する理論研究が行われているが、本研究も、第二次世界大戦の実証研究を通じて、理論的な貢献をも行いたいと考えている。</p> <p>戦争と平和の研究は、理論・実証・国際法の三つの視点から行われる必要がある。本研究は実証研究であり、その研究テーマは次の二つのテーマに分類できる。</p> <p>第一に、国家内部の政治対立である。国内の様々な政治グループの政治対立・妥協がどのような政策の決定・非決定に結びついたのか。この場合、軍事・外交・経済という諸要因が各政治勢力に与えたインパクトを明らかにする必要がある。これまでの第二次世界大戦の分析は、分析の対象が陸軍か海軍、あるいは軍事か外交かに偏る傾向があった。今後の国内政治研究は、バランスのとれた研究である必要がある。</p> <p>第二に、国家間関係と非国家ファクターの分析である。第二次世界大戦は、二国間の戦争ではなく、多国間の戦争であった。したがって、国家間の相互作用を分析する際には、世界史的な視野を持つことが重要である。同時に、国家間のファクターだけではなく、この時代にヨーロッパやアジアを風靡した時代精神やイデオロギーについての分析も必要だろう。</p> <p>東アジアの近代史の問題がマスコミ等で議論されることが多いが、長期的には史料の共有と研究の交流が重要となるだろう。アジア・太平洋戦争において、日本は戦場となった国々に甚大な被害を与えたが、これらの国々における日本研究の現状は予算的制約もあり厳しいものがある。また、日本国内の研究も十分に国外に発信されているとは言い難く、さらには専門の細分化によってそのインパクトも小さくなってきている。海外の史料を収集するだけでなく、国内の史料状況や研究動向を説明し、かつ諸外国のニーズにこたえられるような研究を行う必要がある。</p>	

# 成果報告書

記入日 年 月 日

氏名 鈴木 多聞	留学先国名 台湾	所属機関 中央研究院近代史研究所
研究テーマ： 第二次世界大戦と東アジアの戦後体制の形成		
留学期間： 2010年 10月 ~ 2012年 10月		
<p><b>【研究留学に関する感想】</b></p> <p>留学期間中、数多くの方々にお世話になりました。また、このような貴重な機会を与えていただき、厚く御礼申し上げます。</p> <p>留学当初から、台北の気候が印象的であり、天気を気にする習慣が身についた。慣れるまでは大変であった。年間を通して湿度が高く、個人差はあるだろうが、体力を消耗しやすいように感じた。また、汗をかきやすく、常に何枚かのTシャツを持ち運ぶ必要があった。さらに、寒暖の差が激しく、昼には30度を超える日でも、夜には冷え込んだ。台湾には暖房施設がないことが多く、やや寒さを感じることもあった。</p> <p>1年目の夏は、想像以上の厳しさであった。室内はどこもクーラーが効きすぎており、外の気温は35度を超えていた。真夏の真昼に外で運動をするのは、きわめて危険である。また、屋台などの食事にも気をつける必要があった。大きな台風も何度も上陸してきた。突然のスコールに見舞われることもあり、常時、傘を持ち運び、防水の靴を履いていた。夏の猛暑で体力を奪われると、日中の集中力が急激に低下するため、毎日のように天気に注意する必要があった。</p> <p>台北での留學生活は、海や川など水に囲まれた生活でもあった。その中でも淡水、新店の景色はすばらしかった（写真1）。中央研究院にも南国特有の椰子の木があり、南国の強い日射しとムードが感じられた。</p>		

12月頃から雨期に入り、全く太陽が顔をみせない日が何週間と続くことがあった。中央研究院のある南港は山に囲まれている地形ということもあり、雲に覆われやすい。台北市内は晴れていても、中央研究院の周辺は雨が降っていることもあった。地形を観察したところ、台北の西側の方が晴れていることがわかった。台北が曇っていても、桃園、鶯歌あたりでは太陽がみられることがある。曇り空が続くと気分が滅入るようで、新聞やテレビでも報道されていた。また、雨期のシーズンでも、高雄などの南部は晴れていた。ただ、留学の途中から、あまり天気は気にならなくなった。

留学中、数多くのシンポジウムに出席し、世界各国の研究者の発表に耳を傾ける貴重な機会に恵まれた。第二次世界大戦という研究テーマにしても、日本の研究者と、中国や台湾、韓国、欧米の研究者では、それぞれの視角や立場が異なった。自分の研究手法についても、大いに反省し、改善する点があると感じることの方が多かった。

#### 【研究成果】

二〇世紀の戦争と平和の研究は、理論・実証・法制度の三つの観点から行われる必要があり、その実証部分は、国際政治史・政治外交史・戦史の三つから構成されていると考えている。本研究は、主として、日本の政治外交史を中心とする研究ではあるが、史料間のバランスをとる上で、国際関係史や戦史の重要性も痛感している。日本と外国の史料とでは、そこに書かれている事実関係が異なることが多く、さらには、同じ日本側史料でも、陸軍と海軍、中央と現地とでは雰囲気や全く異なることが多い。実証研究を遂行する上で、歴史史料をバランスよく、より正確に解釈することが大切だと感じた。

2011年2月には著書『「終戦」の政治史 1943-1945』（東京大学出版会）を発表した。本書においては、第二次世界大戦末期の日本の政治史を戦争終結研究の観点から分析しようとし、戦争が、いつ、なぜどのようにして終わるのかを論じた。また、戦争終結の理論的枠組みだけでなく、昭和天皇の政治的役割や原爆投下の問題についても論点を整理し、新史料を提示しつつ、新たな視点を提示した。

本書では四章構成をとり、「第1章 統帥権独立の伝統の崩壊」「第2章 東条内閣の総辞職」では東条内閣が総辞職にいたる過程を、「第3章 鈴木貫太郎内閣と対ソ外交」「第4章 ポツダム宣言の受諾」では降伏にいたる過程を取り上げた。

軍事力は国内政治をどのように変えていったのか。また逆に、日本は、連合国に対抗する軍事力を生み出すため、どのような政策を採用し、どのように自壊していったのか。この問いに対し、第二次世界大戦末期の日本の場合、経済、政治、軍事、外交の順に崩壊し、半壊状態のときに強い政治原動力が生み出されたと考えた。したがって、経済と軍事（第1章）、政治と軍事（第2章）、軍事と外交（第3章）、外交交渉の開始と条件（第4章）という視角が、各章の分析を支える形となった。今日の観点からみれば、客観的には全壊状態ではあっても、当事の日本の政治指導者には、必ずしもそうとは認識されておらず、制度や人の問題に期待してみたり、一か八かの起死回生の賭けを行おうとしたり、悲観的現実から希望的観測を生み出してみたり、死中に活を求めたりした。しかしながら、これらの諸政策は全て失敗し、ときには、負け戦を加速させる方向に作用して、政治指導者に重い心労と責任とを課していった。

本書をベースとして「Japan's Long Road to Surrender: A Political History, 1943-1945」（2011年8月15日、中央研究院近代史研究所）と題した研究発表を行った（写真2）。

また、幕末から戦後にいたる日中関係史や、戦前期の台湾軍（台湾に駐屯していた日本軍）についても研究を行った。中央研究院の図書館だけではなく、国家図書館、国史館、台湾各地の図書館などで史料を収集した。この点については、今後、研究成果を発表していく予定である。



(写真1)



(写真2)